

「佞臣ルフィヌス」像の形成と継承

——4世紀末のローマ帝国における官僚の姿——

南雲泰輔（京都大学）

テオドシウス 1 世の治世は、学説史上において、コンスタンティノーブルが帝国首都として確立してゆく画期であると論じられてきた。すなわち、コンスタンティノーブルが 330 年にコンスタンティヌス 1 世によって創建された都市であることは周知の通りであるが、4 世紀の皇帝たちはそこに滞在することは少なく、通常は帝国各地に散在する皇帝滞在地で多くの時を過ごした。この状況が明確に変化するのがテオドシウス 1 世の時代であって、この時期に、テオドシウス 1 世と彼を取り巻く官僚たちがコンスタンティノーブルに定住するようになり、コンスタンティノーブルは帝国首都として行政的に確立されてゆく、というのである。この学説は、現在の学界における通説的見解とみて差し支えない。しかし、奇しくも同じテオドシウス 1 世と、続くアルカディウス・ホノリウスの時代は、帝国行政を支える官僚制の「腐敗」が顕在化してゆく時期でもあった。

首都成長の影にひしめく「腐敗」した官僚たち——本報告では、コンスタンティノーブルの行政的確立期であると同時に官僚制の「腐敗」が顕在化したとされる時期の官僚のひとり、フラウィウス・ルフィヌスを取り上げる。ルフィヌスは、テオドシウス 1 世のもとで官房長官、次いでコンスル及びオリエンス道長官に就任し、テオドシウス 1 世歿後はアルカディウスを後見した。つまり彼は、名実ともにこの時期の最も有力な官僚であったとってよい。ところが、学説史上でのルフィヌスの扱いを一瞥するなら、18 世紀の E.Gibbon から最近にいたるまで、ルフィヌスは一貫して「腐敗」した官僚の代表的存在として取り上げられており、そこではルフィヌスが「佞臣」たることは何ら疑われたことがなかったのである。

では、なぜ「佞臣ルフィヌス」像は、かく広く受容されるにいたったのか。この「佞臣ルフィヌス」像の形成と継承の過程を問題とした論考は、管見の限り皆無である。そこで本報告では、ルフィヌスと同時代の 4 世紀末の史料から 10 世紀半ばまでの史料のなかで、ルフィヌスがいかなる官僚として描かれ、それがどのようにして継承されていったのかを詳細に跡付け、それによってこの時代の官僚の姿を揚抉することを試みたい。